

# 喜連川の謀将

簗輪 謙

あぶらぜみ  
油蟬が暑苦しく、競うように鳴いている。陽炎が立ちそうなほどの盛夏の熱気は、午後を過ぎても一向に衰える気配がない。強い日差しに目を細めつつ、三十代半ばと思しき、片肌脱ぎの壮年の男は、矢をつがえた弓を構えた。十五間（約二十七メートル）ほど先の的を睨みつつ、きりきりと引き絞る。喜連川城中の弓場に、張り詰めた静寂が流れた。

やがて手の中で弓弦が鳴り、矢は銳く飛んだ。しかし的を射抜くことはなく、的山に空しく突き刺さった。男は髭の濃い顔を忌々しげに歪め、再び矢をつがえる。その後、次々と二の矢、三の矢と放ったが、やはり的には中たらない。

男は苛立ちを隠そうともせず、

「新三郎っ！」

と、傍らに控える若者——小姓の彦間新三郎を怒鳴りつけた。

「は、私になにか……」

「なにかも糞もあるか」戸惑う新三郎を、男は睨み据え、「お主、いま腹の底で、わしのことを嘲っておったであろう。そういう目をしていたぞ」

「あ、安房守様、滅相もございませぬ！ そのようなこと、私は露ほども……」

「ええい、黙れ！ 主に口答えするでないわ！」

男——塩谷安房守惟久（義上）は、ひれ伏して恐れ入る新三郎に、弓を投げつけた。さらには、別的小姓に預けていた杖をひったくり、背中や頭を何度も殴りつけた。うずくまって鈍い痛みに耐えながら、新三郎は助けを求めるように、周囲の塩谷家臣たちを見やった。しかし、彼らは気の毒がってはいるようだったが、身を挺してこの主君を止めようとする者は一人もおらず、ただ呆然と、理不尽な「折檻」を傍観するばかりだった。

やがて、惟久は杖を放り出し、「これだから余所者は」と吐き捨てるようにいった。

（……ならば、俺のことなど、召し抱えねば良かったではないか！）

危うく口から飛び出しそうになったその言葉を、新三郎は辛うじて飲み下し、ふらつきながら居住まいを正すと、地面に額をこすりつけて惟久に詫びた。

「申し訳ございませぬ。なにとぞ、ご容赦のほどを……」

「ふん」

惟久は片肌に袖を通し、肩を怒らせつつ去っていった。その足音が遠ざかってから、新三郎は小さく嘆息した。身体のあちこちが、軋むように痛む。

（なぜ、こんなところに来てしまったのか）

言葉に出す代わりに、地面に唾を吐いた。口の中が切れていたのか、わずかに血が混じっていた。

ときに、天正十七年（一五八九）、七月。時代は、戦国と呼ばれる乱世の最中にあつた。

下野国<sup>しもつけのくに</sup>の宇都宮氏<sup>うつのみや</sup>といえば、平安以来四百年の歴史を誇る、北関東の武家の名門だ。関白・藤原道兼<sup>ふじわらのみちかね</sup>の曾孫<sup>そうえん</sup>、宗円<sup>そうえん</sup>を家祖とする同氏は、宇都宮城を本拠に、野州<sup>やしゅう</sup>（下野国の略称）中央部の広範な版図を支配し、最盛期には関東屈指の有力大名として君臨した。

同国の塩谷郡を領する塩谷氏は、その宇都宮氏の一門であり、北方の守りを代々任せられてきた重臣であった。もっとも、新三郎の主君、喜連川城主・塩谷惟久は同氏の分家に過ぎず、同じ宇都宮家臣ながら、塩谷氏総領（惣領）の意を仰ぐ立場にあった。宇都宮家中や近隣の住民からは、総領家と区別する意味で、居城にちなんで「喜連川殿」などと呼ばれることが多い。

「そんな些細なことですら、あの方は気に食わないのだろうな」

井戸の前でもろ肌を脱ぎ、肩や腕の傷をすすぎながら、新三郎は独りごちた。

惟久は、塩谷氏の総領である、塩谷義綱<sup>よしつな</sup>とひどく仲が悪い。その因縁は、彼らの父親同士の争いに由来する。

そもそも、喜連川の惟久と、総領家の義綱は従兄弟<sup>いとこ</sup>であり、すなわち、彼らの父親は兄弟であった。喜連川の先代当主・弥七郎は、弟であったため分家を継いだが、彼はひそかに野心を抱き、二十五年前一一永禄七年（一五六四年）、総領である兄・弥六郎に対して謀叛<sup>むほん</sup>を起こす。喜連川勢は、夜の闇に紛れて総領家の居城（川崎城）を急襲し、弥六郎およびその妻子らを討ち果たした。かくして、喜連川の弥七郎は、望み通り塩谷氏総領の座についた。ところが、あの夜襲の混乱の中、弥六郎の幼き遺児が一人だけ、重臣の助けによって窮地を脱し、ひそかに山中へ落ち延びていた。

数年後、その遺児一一塩谷義綱は、主家である宇都宮氏の仲介によって、本拠・川崎城に帰還を果たし、総領家の家督を継承した。一度は家督を奪った弥七郎も、宇都宮氏の命によって義綱と和睦し、元の喜連川城主に取まつた。

やがて、弥七郎が病没すると、その子・惟久が喜連川城主を継ぎ、いまに至っている。惟久にしてみれば、口にこそ出さないものの、

一一義綱さえ生きておらねば、わしこそが塩谷の総領であった。

という肚<sup>はら</sup>なのだろう。義綱の名を聞いただけで、露骨に機嫌を悪くし、小姓や侍女に当たり散らすことも珍しくなかった。もっとも、義綱の方も似たようなもので一一彼にしてみれば、父の仇の子である惟久を、忌み嫌うのも無理はなかつたが一一評定などで両者が顔を合わせると、その険悪な空気に、家臣たちは生きた心地もしなかつた。

(とはいって、俺がこうして仕官にありつけたのも、両家の仲の悪さゆえと言えなくはないが……)

新三郎は、元は下野南西部の小大名・佐野家の家臣であった。故あって牢人し、各地をさ迷ったが仕官先は見つからず、ようやく辿り着いたのが、この喜連川城であった。

今から半年前、新三郎は、塩谷義綱の家中に遠縁の者がいると聞きつけ、仕官の仲介を頼み、なんとか義綱との拝謁までにはこぎつけた。しかし、文官の子で、武芸が苦手な新三郎を、義綱は気に入らず、けんもほろろに断られた。

途方に暮れた新三郎は、辿って来た道を逆に戻り、義綱の居城・川崎城から南東に三里半（約十四キロ）ほど離れた、喜連川の城下で宿を取った。

喜連川城は、小高い丘陵上の城郭であり、関東と奥州を繋ぐ街道、奥大道おくだいどうを見下ろす位置にある。このため、麓の城下町は宿場町も兼ねており、人の行き来も多く、なかなかのにぎわいであった。

ところが、その晩、喜連川城主・塩谷惟久の命によって、塩谷家中の者たちがいきなり、こちらが泊まる宿所に押し寄せ、新三郎は半ば強制的に、わけもわからぬまま城中に召し出された。そうして対面した惟久は、いかにも鷹揚な態度で、

——お主か、総領殿に仕官を願い出て、断られたというのは。わざわざ頼って来た者を見捨てるなど、塩谷一門の名にかかる。もし望むなら、わしが召し抱えてやっても良いが、どうじやな。

と言ってみせた。あのときは、地獄で仏を見たような気がしたものだ。

だが、その言葉が惟久の懐の深さなどによるものではなく、単に義綱への当てつけに過ぎなかつたのだと知るには、さして月日はかからなかつた。もともと狭量な惟久は、当初こそ新三郎に対して客分のように丁重な態度を見せていたが、次第に、

——お主の言葉使いは聞き苦しい。佐野の者は上野訛こうずけなまりが半端に混ざつていて耳障りじや。

——多少、文字や古典を人より知っているからといって、驕おごつておるのではないか。文官上がりはどいつもこいつも、すぐにそうやって賢しらな顔をしよう。

などと、ねちねちと言いがかりをつけるようになり、ついには先ほどのように手を上げるまでになつた。もともと、新三郎のような他郷の人間が好きではないのだろう。しかし、義綱への見栄のために、召し放つわけにもいかないことが、ますます惟久を苛立たせているらしかつた。

(我ながら、よく耐えているものだ)

水桶に映つた、傷や青あざだらけの己の身体を眺めつつ、新三郎は苦笑するほかなかつた。いっそ、喜連川を去ろうと、何度考えたことだろう。

「……去つたところで、どこに行けばいいのだろうな」

呟いてから、はっと我に返る。思わず口に出た言葉をかき消すように、新三郎は汲み上げた水を頭からかぶった。わずかに浮かんだ涙は、冷たい清水とともに流れ落ちていった。

それから、数日が経った。

その日の喜連川城中は、どこか落ち着かない空気に包まれていた。家の侍たちは、胃でも悪くしたように憂鬱な面持ちの者が多く、小者や女中なども不安げに、ひそひそと何事を囁き合っている。

「あの『化け狐』が、帰って来ているらしい」

偶然、朋輩の小姓たちが、詰所でそのようなことを話しているのを耳にした。

「なんだ、その化け狐というのは」

「ん？ あ、いや……」

尋ねられた朋輩は、気まずそうに言葉を濁したが、新三郎がさらに問いただすと、渋々といった様子で語り始めた。

「わしがそう呼んでいたと言うなよ。……新参のお主は知るまいが、喜連川にはかつて、そういうあだ名のご家老がおったのよ」

その男の名は、岡本正親おかもとまさちかというらしい。喜連川塩谷氏の譜代の老臣で、齢は六十を過ぎているという。

——（正親は）驕りを本として、民の嘆きをも顧みず、家中の悪い所をも弃えず（『那須記』）

などと評されるように、驕慢で欲深く、民や朋輩のことなど気にも留めない酷薄な男で、当然ながら、家中や領内ではひどく忌み嫌われていた。しかし一方で、その才は卓越しており、兵書や古典に通じ、戦の指揮にも長け、とりわけ策謀の巧みさにかけては、余人の及ばぬところであり、「智謀の玄妙なること、あやかし妖の如し」などと言われた。

家の重臣たちは正親を憎みながらも、一方では恐れ、その能力を頼みとするほしかった。あの横柄な惟久でさえ、この老臣相手にはどこか遠慮がちに接するところがあったという。

——あやつは、喜連川の化け狐よ。

狐は、老いれば妖力を得て、人を化かすようになるという。畏怖と侮蔑、両方の意味を込めて、正親が陰でそう呼ばれるようになったのも、無理はなかった。

「それほど権勢があったのに、岡本殿はどうして、喜連川を離れたのだ」

「離れたのではない。……追われたのよ」

小姓が言うには、二年前、正親がひそかに喜連川城の宝物蔵を物色し、累代の武具や貴重な書画などを売り払って、金銭に変えていたことが発覚した。これは、己の私腹を肥

やそうとの企みに相違なしと、家中では凄まじい反発が起り、正親に腹を切らせるべきだという声も上がったが、主君の惟久がなんとか彼らをなだめ、一命だけは許された。

しかしながら、さすがの正親も、従来の地位に留まることはできず、家老の座から退き、「余生は俗世より離れ、高野山で仏道に帰依したく存する」などと言って喜連川を去つたが、実質的には追放であることは、誰の目にも明らかだった。

その正親が、帰つて来た。高野山を下つて還俗した彼は、すでにこの城中の別室で待たされており、これから惟久に拝謁するらしい。だとすれば、新三郎ら当直の小姓たちも、その場に付き従うことになるだろう。

「いったい、なんのために帰つてきたのだろう」

「わしが知るかよ。とにかく、くれぐれも、目をつけられるような真似をしないことだ。化け狐に祟たたられても知らんぞ」

小姓は冗談めかしくそう言ったが、声が微かすかに震えていた。

数刻後、正親は城中の広間に通された。惟久の傍らに控えていた新三郎は、その姿を初めて目にした。

痩せこけた、白髪白鬚の老人。面長な輪郭や、切れ長の目つきは、なるほど狐を思わせる。しかし、それ以上に目を引くのは、齡に似合わぬ派手な紅地の胴服で、背中にはよりもよつて、老いた白狐が大きくあしらわれていた。

「趣味の悪い衣じゃな」

惟久は苦々しげにこぼした。

「己が陰でなんと呼ばれているか、知らぬわけではなかろうに」

「だからこそ、でござりますよ」正親はにやにやと、粘りつくような笑みを浮かべ、「これを着て辺りを歩けば、喜連川の化け狐が帰つて来たと、領内の隅々まで報せが駆け巡りましょう。いちいち伝えて回る手間が省けます」

「相変わらず、小細工の多い男よ」

「ええ、それだけが、讃岐さぬき守のかみ（正親）めの取り得にござりますゆえ。……それに、それがしは、もともと狐が好きなのですよ。狐死すれば正に丘首きつねす、と唐土まさ（中国）の故事にもあることですしな」

「……『礼記』」

誰にも聞こえないほどの声で、無意識に、新三郎は呟いていた。が、正親は聞き逃さなかつたらしく、

「おお、ご存知か！」

と、声を弾ませ、こちらを覗き込んできた。

「さすがは我が殿、見どころのある若者を召し抱えておられる」

「うん？ まあ、な……」

いつものこの主君なら、「また賢しら顔をして、わしを虚偽にするか！」などと新三郎に当たり散らしそうなものだが、褒められて気勢を削がれたらしい。顔を渋らせる惟久を尻目に、正親は嬉しそうに続ける。

「さあ、説明されるがよろしい、若侍殿」

「は……」

恐る恐る、新三郎は口を開く。

「つまり、狐は、死ぬときは必ず、己の生まれ育った丘の方に頭を向けて死ぬという意味の言葉です。故郷への恩愛を忘れぬ、義理堅い獸である、と」

「なるほどな」

大して興味もなさそうにうなずき、惟久は正親の方へ向き直った。

「……回りくどいのは好かぬ。本題に入れ、正親。なんのために、お主の帰参を認めてやったと思っている」

「はっ」

正親も容儀を正し、次のように告げた。

「かねてよりお伝えしていた通り、上方におわす関白殿下一豊臣秀吉公が、じきに、東国の平定を行われます。すでに、かの北条家も、豊臣への臣従に向けて、交渉を進めております」

現在、関東最大の大名は、相模小田原城を本拠とする北条氏（後北条氏）である。

同氏は、宇都宮氏のような伝統的な東国大名とは違う、戦乱の中で台頭した新興勢力である。家祖・伊勢宗瑞——後世、北条早雲の俗称で知られる——は、もとは京の室町幕府の高級官僚であったが、風雲に乘じて関東で国盗りをはじめ、一代で相模・伊豆二カ国を切り従え、跡を継いだ嫡子・氏綱の代からは、古の鎌倉執権にあやかって北条氏を称し、ますます拡大を進めていった。

宗瑞、氏綱、氏康、氏政——そして現当主・氏直で五代目に至る小田原北条氏の勢力圏は、いまや相模と伊豆のみならず、武藏、下総、上総、常陸、上野、そしてこの下野にまで及んでおり、今にも関東一円を呑み込まんほどであった。

関東の名門諸侯の多くは、この新興大名の勢いに抗しきれず、あるものは滅ぼされ、あるものは降った。新三郎の旧主・佐野氏などもその一つで、日に日に強まる北条の圧力に耐えかね、北条氏からの養子を当主として迎えることで、家の実権すら差し出した。このため、反北条派の家臣は、佐野家から相次いで出奔した。……もっとも、新三郎の場合は、姉が反北条派の家臣に嫁いでいたために、家の風当たりがきつくなり、追い詰められ、やむなく故郷を去ったに過ぎなかつたが。

その一方で、下野の宇都宮氏、常陸の佐竹氏、下総の結城氏といった一部の大名たちは、

——坂東武者の誇りにかけて、屈するわけにはいかぬ。

と、反北条を掲げて同盟を結び、長きにわたる抵抗を続けていた。

しかし、その戦いも、じきに終わろうとしている。上方で勃興した中央政権——豊臣家の力によって。秀吉は、今や西日本をことごとく手中に収めており、その軍事力を前にしては、さしもの北条家も降るほかない。……そのような見解を、正親は語ってみせた。

(まったく、どういう手練手管を使ったのやら)

傍で話を聞いているだけの新三郎には想像もつかないが、あらかじめ人に聞き尋ねた話では、この岡本正親という男は関東を離れたのち、巧みに秀吉の懐に入り込み、今では豊臣家の客将に収まっているのだという。信じがたい話だが、宇都宮家に派遣してきた豊臣の使者にも確認したというから、間違いないとのことだった。

これまで、正親は書状を通じて、上方の様子や情勢を惟久に伝えるなどしてきたが、いよいよ関東の平定が近いということで、下野方面の情勢探索も兼ねて、喜連川に戻ってきたのだ。

「年内には、北条家の当主か、その父が上洛し、臣従を誓う予定にござります。そのちは、関白殿下御自ら東国にて裁定を行い、降る者には所領を安堵し、歯向かう者は取り潰して、見せしめとすることでしょう。関東に平穏が訪れるのは、そう遠い日ではありません」

「しかし、油断をしているわけには参らぬな」

腕を組み、惟久はうなつた。

「確かに、近ごろの北条は、豊臣への臣従がため、宇都宮をはじめ関東諸侯との戦を、控えているようではある。が、北の山犬どもまでもが、素直に尾を振り、<sup>こうべ</sup>頭を垂れるかどうか」

彼がそう指摘するように、敵は北条だけではない。特に、近年、急速に勢力を拡大している奥州の伊達政宗は、かねてより宇都宮とは敵対関係にある。また、伊達と宇都宮の版図の境を領する、那須氏の動向も怪しい、と惟久は見ているようだった。

那須氏は、かつては宇都宮、佐竹ら反北条連合の一員であったが、近年は北条寄りの姿勢を見せており、宇都宮方と小競り合いが絶えなかった。

「当主の資晴は、『我が那須も、関白殿下に臣従する意向である』『もはや、宇都宮と争うつもりはない』などと申し伝えてきておるが、怪しいものよ。まして、伊達の圧力がさらに強まれば、いつ寝返ってもおかしくない」

いや、存外、すでに寝返っていないとも限らぬ。……険しい顔つきで、惟久はそう語った。宇都宮領の北方の守りを任せられ、那須氏と領土を接する塩谷氏の一門としては、長年

の仮想敵であるこの勢力の動向は、ある意味では北条や豊臣以上に気になるところであろう。

「されど、殿の母君は、那須のご家老（大関氏）の子でございましょう？ それほど縁深くとも、那須家は信用なりませぬか」

「人が悪いぞ、正親」

惟久は小さく舌を打った。

「お主の前にいるのは、実の兄を殺して、総領の座を奪おうとした男の息子だ。……こう言えば満足か、性悪狐め」

いよいよとなれば、血の繋がりなどなんの保障にもならない。喜連川塩谷氏の歴史自体が、なによりもそれを証明していた。

あえて、主君にそのことを言わせるように仕向けた老臣は、別段、悪びれた様子も見せず、

「分かっておられるようで、安堵致しました。ところで……」

と言って、新三郎の方へ視線を向けた。

「なにか言いたいことがありますな、若侍殿、いや、新三郎殿と申されたか」

「あ、いや……」

新三郎は、惟久の顔色をうかがった。この主君は、いかにも面白くなさそうな表情をしていたが、かといって、止めるほどの理由も思いつかなかつたらしい。

「申してみよ」

と顎をしゃくって、発言を促した。

「その、大したことではないのですが……そもそも、当家は宇都宮に仕える塩谷の、分家に過ぎませぬ。上方の動向などそこまで気にせずとも、総領家の判断に、ただ従えばいいのでは……」

新三郎がそう言った直後、耳をふさぎたくなるほどの哄笑が、広間に響き渡った。正親が、腹を抱えて大笑いしていた。

「なにをお笑いになられる」

「いや、失敬。ずいぶんと、人の好いことだと思いましてな」

目尻に浮かんだ涙を拭いつつ、正親は答える。そして、ささやくように声をひそめ、こう続けた。

「新三郎殿、よくお考えあれ。その総領殿が、決して誤ることがないと、どうして言えましょう」

思わず、息を呑んだ。

もし、塩谷氏総領の義綱が判断を誤れば、喜連川も共倒れになる。それを避けるため、万が一に備え、独自に豊臣の動向を探り、正親を通じて繋がりを作つておく必要がある。……この老臣は、暗にそう言つているのだった。

(敵だけでなく、味方まで疑うなど!)

そう声を上げそうになつたが、思い返してみれば、義綱と惟久の関係は、元より信頼などからはほど遠い。また、西国でも、秀吉に歯向かつたために、あるいは逡巡の末に動きかねて機を逃したがために、取り潰された領主がいくらでもいることは、関東でも聞こえてくる。

「いや、いつそのこと」正親は含むように微笑し、「総領殿には、判断を誤つて潰れて欲しいというのが、殿の御心の内やもしさせぬが……」

「な、なにを申すか！」

動搖を誤魔化すように、惟久は怒鳴つた。

「わしは、あくまで塩谷の家名を残すことを思い、あらゆる事態に備えておるだけじゃ。心得違いを致すでないわ」

傍から聞いていても、あまりに白々しい物言いではあったが、正親はそれ以上追及することではなく、澄ました顔で続ける。

「左様でござりますか。しかしながら、それがしは、己の望みを取り繕うたりは致しませぬ」

「望み？」

「ええ。といつて、老いさき短き身にあつては、今さら、所領や金品など欲しませぬ。ただ、この讃岐守が、豊臣と喜連川を繋げ、存続を成し遂げた暁には、家の者はだれ一人、それがしに頭が上がらなくなる。……そうして、かつてそれがしを追い出した者たちを、思う存分、這いつくばらせて詫びさせたい。それだけが、今の望みにござります」

口の端を大きく吊り上げ、老臣は老い皺ばんだ顔いっぱいに、不気味な笑みを浮かべてみせた。誰もが言葉を失い、静まり返る広間の中で、くっくと低く漏れる正親の忍び笑いが、妙に大きく響いた。

しかし、順調かに思われた東国平定計画は、この数カ月後、突如として破綻することになる。

同年十月下旬、関東を激震させる、ある事件が起こった。

北条方の軍勢が、すでに豊臣に臣従していた真田氏の拠点・上州名胡桃城を占拠したのである（名胡桃城事件）。主家の意向を超えて、境界付近で紛争が起きてしまうことは、この時代としては珍しいことではない。だが、上州における真田と北条の領土境界は、豊臣政権直々の裁定によって決せられたものであり、この侵犯は秀吉の意向を無視する、重大な反逆であると見なされた。

このとき、北条家当主の氏直か、その父・氏政が、すぐさま上洛して弁明し、二心がないことを示していれば、あるいは赦免の道もあったかもしれない。しかし、北条側は「激怒する秀吉のもとへ不用意に出向けば、拘束され、処断されかねない」と危惧して逡巡し、ますます豊臣側の心証を悪くした。結局、両家の関係はほどなくして決裂し、翌年一一天正十八年（一五九〇年）三月、秀吉は二十万を超える大軍勢を率いて、北条領へと攻め寄せた。世にいう、小田原征伐である。

三月二十九日、北条方の最前線拠点・伊豆山中城を、わずか半日で陥落させた豊臣軍は、四月四日には北条方の本拠・小田原城まで攻め寄せ、包囲陣の構築を進めつつ、各地の拠点を次々と落としていっていった。

「いったい、義綱めはなにをもたつておるのだ！」

戦況の報告を受けた惟久は、怒りのままに床を殴りつけた。すでに、四月も半ばを過ぎている。豊臣軍は今や、小田原城を蟻の這い出る隙間もないほどに取り囲み、本営として、石垣造りの堅固な陣城の築城を、着々と進めているという。

その間にも、伊豆下田、相模玉縄、上野松井田、箕輪、厩橋、武藏江戸、河越といった、北条方の諸城陥落の報せが、この喜連川にも聞こえてくる。

もはや、大勢は決した。このままいけば遠からず、北条は攻め滅ぼされるだろう。宇都宮家としては、当主・国綱自ら軍勢を率い、一刻も早く秀吉の元へ参陣して、忠勤を示すべきであった。

ところが、国綱は動けずにいた。同行を命じた、有力一門の塩谷義綱が、あれこれと理由を構えて、居城の川崎城に籠り続けているからだった。

——もしや、塩谷は敵方に内通し、謀叛を企てているのでは。

そのような疑念が、宇都宮家ではまことしやかに囁かれている。このため、国綱は決断がつきかね、未だ領国より腰を上げられずにいるらしい。

「あの阿呆は、塩谷はおろか、宇都宮をも滅ぼすつもりか！」

もはや、『総領殿』などと、建前の敬意を払う余裕もないらしい。惟久は怒気に満ちた形相で、吐き捨てるように言った。

しかし彼の言う通り、このまま豊臣方の参陣命令を無視し続ければ、宇都宮も塩谷も、共に取り潰されることは疑いようもなかった。

「されど、総領殿の不安も無理からぬこと」

煎茶をひとすすりして、正親が言った。他人事のように、落ち着き払った口ぶりだ。

「那須が、ひそかに伊達と結び、総領殿が留守にした隙をついて、塩谷領へ侵攻しようと企てている……などという風説もございますゆえ」

「だからあやつは腰抜けだというのよ。敵が攻めても来ないうちから、その影に怯えおって。……新三郎、酒を持て！」

「は……」

まだ日が高うございます、まして、いつ那須方と戦になるか分からぬというのに……そんな言葉が頭をよぎったが、口には出さなかった。どうせ言ったところで、この主君は聞き入れないだろうし、なにより、惟久の手が小刻みに震えているのが、新三郎の目に映った。

(このお方も、追い詰められているのか)

苛立ちと焦燥を紛らわせる術が、酒しか思いつかなかつたのだろう。その緊張は、新三郎にとつても他人事ではなかつた。

運んできた瓶子を傾け、惟久の手元の盃に酒を注いだ。その盃をひとすすりして、彼は大きく息をついた。

「とにかく、このままでは、義綱の阿呆のせいで、喜連川まで共倒れとなりかねぬ。なにか策はないか、正親」

「また関白殿下に、鷹や馬でも進上致しますか」

「いや、その程度ではもはや心もとない。もっと、確実な手立てはないのか」

そう言われて、正親は少し考え込む素振りを見せたが、やがて思いついたように、

「ああ、良い手がありますぞ。……お父上が仕損じたことを、息子のあなたが成し遂げればよろしい。さすれば、共倒れは免れます」

老臣は笑みさえ浮かべながら、世間話でもするかのように述べた。惟久も、傍らに控えていた新三郎も、一瞬、その意味を測りかねたが、

「ば、馬鹿な」

惟久がうめき声を上げたのと、新三郎が真意に気づいたのは、ほとんど同時だった。——義綱が動かぬせいで難渢しているのなら、惟久の手で討ち取り、総領家の家督を奪つてしまえ。この老臣は、そう言つてゐるのだった。

「ああ、口封じの必要はござりますまい。余所者の新三郎殿から話が漏れたとしても、家中の者たちは信じないでしょう。なにより、手駒は多い方がいい」

そう言われてから、自分の命が危機にあったことに、新三郎はようやく気付いた。たまたま他の小姓たちは交代の関係で外しており、今この一室には、惟久と正親、そして新三郎しかいなかつた。

思考を先回りされ、拳を振り上げようと考える前に、下げどころを抑えられてしまった惟久は、しばし呆然としていたが、やがて、

「馬鹿げている」

と呟いて、再び酒をすすつた。その横顔は青ざめており、口元は微かにわなないでいる。

「いま、わしが義綱を攻めてみろ。それこそ、謀叛人ではないか」

「そうですな。そこが困ったところですが……では、こうしましょう。総領殿に、先に謀叛人になって頂くのです。さすれば、これを討つた殿は、宇都宮に、ひいては豊臣に弓引く狼藉者を、先んじて成敗した忠臣にほかなりませぬ」

「濡れ衣を、でっちあげろと言うのか？」

「さて、まんざら、濡れ衣と言えるかどうか」

口元を扇で覆い、正親はくすくすと忍び笑いを漏らす。

「戦端が開かれて間もない時期、<sup>ちまた</sup>巷では、いかに豊臣が大軍とはいえ、あの北条が相手では、少なからず攻めあぐねるのではないか、などという見立てもござつた。恐らく、総領殿はその頃に、伊達方から寝返りの働きかけを受けているはずです。……殿と同じように、ね」

「なつ……」

狼狽のあまり、惟久は盃を取り落とした。濡れた袴を拭うことも忘れ、魚のように口をぱくつかせている。

「い、いや、わしは……」

「ええ、わかつております。まだ戦の見通しも立たぬ時期に、そのような誘いに乗つたはずがない。されど、万が一、状況がどう転んでもよいように、はつきりと関わりを絶つほどの、強い拒絶もしていないはず」

そこが付け目ですよ、と正親はささやいた。義綱の居城——川崎城の文倉には、伊達方とやり取りをした書状が、まだいくつも残されているはず。それさえ押さえてしまえば、言い逃れは効かなくなる、と。

「な、なりませぬ！」

たまらず、新三郎は声を上げた。このまま傍観していれば、惟久はこの化け狐のような老臣にそそのかされ、本気で総領家を襲いかねない。

「今は、塩谷一門……いや、宇都宮家中が一丸となり、結束して事に臨むべきときのはず！だというのに、味方である総領殿を陥れるなど、このような非道、間違っておりま

す！」

「非道？」

老臣は鼻で笑うと、目を細めて新三郎を見た。

「なら、なにもせず、ただ手をこまねいている方が良いと？ それで全てが滅んだとしても、同じことが言えますかな」

「まだ滅ぶと決まったわけではありませぬ！」掴みかかるような勢いで、新三郎は身を乗り出した。「なぜ、総領殿を信じ、説得を続けようとなさらないのです！ 家を残し、領地を守りたいという思いは、総領家も喜連川も変わらぬはず！」

自分が追われた、佐野家もこうだった。新三郎の脳裏には、かつての旧主家の光景が浮かんでいた。親北条と反北条、方針を巡って家中は真っ二つに割れ、両派は互いに疑い合い、憎み合い、家としての体を為さぬほどバラバラになっていった。そんな佐野家に、もはや一丸となった抵抗など望むべくもなく、家祖・藤原秀郷以来、東国に武威を誇って来た佐野の家督を、西国からの侵略者に過ぎない、北条の養子などに明け渡す羽目になってしまった。

もし結束していれば、まだ戦えたかもしれないのに。あるいは降るにしても、せめて家督を守るだけの抵抗は出来たかもしれないのに。

あんなことを、繰り返してはならない。新三郎は強く思った。だが、正親は、こちらの必死の訴えにも眉一つ動かさず、冷ややかな眼差しを返すばかりだった。

「……貴殿はまだ若い。いずれ知ることになるでしょう。なにかを守るためには、なにかを失わねばならぬということを」

そう言って、彼は惟久の方に向き直り、

「殿、一つお願ひしたき儀がございます」

「なんじや」

「策を為す前に、根回しが必要です。豊臣方の官吏らが、こちらの言い分をすんなり聞き入れてくれるよう、あらかじめ、鼻薬を利かせておく必要がございます。……つきましては、この喜連川郷から、領地をいくらか、豊臣家に差し出すことをお許し頂きたく」

「なつ……いや、しかしそれは」

惟久はさすがに躊躇したが、正親は畳みかけるようにして続けた。

「あなたが総領となった暁には、塩谷領一帯が自らのものになるのです。ほんの少しの領地でそれが買えるのなら、安いものではありませんか」

しかし、豊臣側との交渉にあたって、いちいち惟久の許可を待つてはいけば、時がかかり、機を逸するかもしれない。……そのようなことを、正親は滔々と説く。新三郎は慌て

て、このような言葉に乗せられてはならない、義綱を討つ以外にも道はあるはずだと、主君を止めるべく、必死に言葉を尽くした。

だが、惟久はもはや耳を貸さなかった。彼はただ一言、

「喜連川十五郷の差配、正親に一任する」

とだけ告げると、あとはなにも言わず、ただ、決断の重大さから目を逸らすかのように、無言で酒をあおるばかりだった。

(化け狐め……)

腹の底でそう吐き捨て、新三郎は正親を睨みつけたが、この謀略を企てた張本人は少しも悪びれた様子を見せぬ、道に迷った旅人を助けてやったかのような顔つきで、満足げに煎茶をすすっていた。

二日後、正親は計略を進めるべく、秀吉が本陣を置く小田原へと発った。その際、新三郎も同行を命じられた。豊臣方への工作が済み次第、惟久にそのことを伝える、連絡役としての任だ。無論、断ることなど、出来るはずはなかった。



喜連川を発って五日、ようやく小田原に至った新三郎は、包囲する豊臣軍の豪壮さに肝を潰した。十万、二十万と報せには聞いていたが、立ち並ぶ諸将の旗や陣幕は、地の果てまで続くかのようであり、軍勢はその周囲を雲霞の如く埋め尽くしている。こんなに大勢の人間を、この目に見るのは初めてだった。

それに、彼らの軍装の美しさはどうだ。たまたま通りかかった陣所の警固番衆などは、一兵に至るまで金箔張りの頭形兜ずなりかぶとで揃えていた。宇都宮家の旗本衆ですら、この場に引き出されれば、足軽雜兵の集まりのように見えるだろう。まして喜連川衆など、百姓一揆も同然だ。

(これでは、北条も敵うはずがない)

その財力、軍事力の凄まじさに、新三郎はただただ圧倒されるばかりだった。

翌日、豊臣軍の本営である笠懸山城（石垣山城）で、新三郎は正親の従者という扱いで、秀吉への拝謁に同行する運びとなつた。まずは秀吉の機嫌をうかがい、しかるのち、豊臣家の官吏への工作を進める運びであると、新三郎は聞かされていた。

普請場では、石材や木材、瓦などが目まぐるしく運びこまれ、工匠らの声や、木を削り、槌を打つ音が、絶えず辺りに響いている。その一角に陣幕を張り巡らせた本陣で、新三郎は正親に従い、初めて秀吉と対面した。

近臣たちがざらりと居並ぶ中、奥の床几に腰を据えていたのは、色の黒い、小柄な初老の男である。ひいとおどし緋糸緘の具足の上から、肩口を水色の鳥羽で飾り付けた、恐ろしく派手な金色の陣羽織を纏っている。

「久しいのう、正親」

男は歯を見せて、微笑みかけた。と、思った次の瞬間には、床几からさっと立ち上がり、近臣たちの制止も聞き入れず、正親のもとへ歩み寄って、その手を握りしめた。

「会いたかったぞよ。右も左もわからぬ関東で、お主のようにこの地に精通した男がいることが、どれほど頼もしいか。下野からはるばる、よう駆けつけてくれた、ほんに、よう來てくれたのう」

うつすら涙さえ浮かべながら、秀吉は正親の肩を叩き、繰り返し感謝の言葉を述べた。あの大軍を率いる天下人とは、とても思えない軽々しさに、新三郎は唖然とした。

「もったいのうございます、殿下」正親は畏まってその場にひれ伏した。「そのようなお言葉を頂戴するなど、それがし如きに恐れ多きこと。なにしろ、宇都宮家の参陣すら、未だ果たせぬ次第なれば……」

「さて、そこよな」

秀吉の顔から、笑みが消えた。

「困ったなあ、正親よ。そちの主家筋の総領の、塙谷伯耆守ほうきのかみ（義綱）と申したか。そやつが腰を上げぬせいで、国綱も動けぬという話ではないか」

口ぶりこそ変わらず親しげだったが、その目つきは氷のように冷え切っている。傍らに控えている新三郎ですら、背筋が寒くなるのを感じた。

「のう、正親、よもやとは思うが、そやつ、敵方に通じておるのであるまいな」

声を低くし、秀吉は問い合わせる。すると、正親は顔を上げ、

「それはあり得ませぬ」

と断言した。そして、彼は懷から紙のようなものを取り出し、うやうや恭しく秀吉に差し出した。

「塙谷一門総領、伯耆守義綱殿は、すでに参陣を決し、かように誓紙をしたためられました。いまは、主君たる宇都宮国綱様と共に、急ぎ出陣の支度を進めておられます」  
(なんだと！)

危うく、新三郎は声を上げそうになった。いつの間に、義綱に誓紙など書かせていたのだ。いや、そもそも、計画では、義綱を謀叛人として陥れるはずではなかつたか。混乱

する新三郎をよそに、誓紙を受け取った秀吉は、しばし書面に目を落としたのち、ため息をついた。

「とろくさいのう、関東者は。うぬらの先祖は、頼朝公が一声かければ、たとえ一騎でも即座に鞍にまたがり、いざ鎌倉と馳せ参じたと聞くぞ。こんなものを書いている暇があれば、そうすべきではないか、のう？」

「申し開きの次第もございませぬ」

「が、誓紙すらよこさぬ那須に比べれば、塩谷はまだ可愛げがある。いま少しだけ猶予をやろう。しかし、長く待つとは思わぬことだと、帰って伯耆守に伝えよ」

「ははっ！ かたじけのうございまする！」

正親は深々と平伏した。新三郎もまた、それにならって頭を垂れた。そして、二人はこの場から退出しようとしたが、

「ああ、待て、正親」

不意に、秀吉に呼び止められた。色黒の顔に、含むような笑みが浮んでいる。

「お主の所領を安堵してやろう」

「……恐れながら、所領の安堵は、宇都宮家の参陣が叶ってからというお約束では？」

「いや、お主はここまでよう骨を折ってくれた。予は働き者が好きじや。それにな、先にお主の所領を安堵してしまって、塩谷の総領にはこう伝えるのよ。早う来ないと、お主の所領を召し上げて、予の気に入りの岡本にくれてしまうぞ、とな。夜郎自大な田舎侍に、この脅しは効くぞ。ただ領地を奪われるばかりでなく、分家の家来の下風に立たされるなど、とても耐えられまいよ」

「これはなんとも、それがし如きには思いもよらぬところにて……」

「なに、このぐらい智恵のうちにも入らぬわ。して、正親よ、お主の父祖代々の所領はいかほどじや？」

ほんの一瞬、正親は躊躇する素振りを見せたが、すぐにこう答えた。

「……我が岡本家の領地は、野州塩谷郡、喜連川十五郷にございます」

天下人の前でなかつたら、新三郎は叫び声をあげていただろう。それは、塩谷惟久の所領の全てであった。

# 四

同年七月五日、北条氏は秀吉に降伏し、小田原城を開城した。当主・氏直は高野山に追放、その父・氏政は切腹。かくして、戦国大名としての小田原北条氏は、ここに滅亡した。

戦後、秀吉は宇都宮城において、関東領主たちの処分を決定した（宇都宮仕置）。

宇都宮国綱は一門の塩谷義綱らと共に、五月には秀吉のもとへ参陣し、豊臣軍の指揮下で戦ったため、功績を認められて本領安堵。一方、再三の命令を無視して参陣しなかつた那須資晴は、それまでの不審な姿勢も含めて咎められ、改易されてしまっている（ただし、那須旧臣らの運動の成果により、同年十月には、資晴の嫡男・藤王丸が知行五千石を与えられ、翌年には加増されて一万石となり、少身ながらも大名復帰を果たした）。

そして、喜連川城の塩谷惟久のもとへも、豊臣政権による裁定の結果が、岡本正親によつてもたらされた。

家臣たちが居並ぶ広間で、正親は書状を読み上げる。が、惟久は、その内容を聞き終えるより早く、

「ふ、ふざけるなっ！」

激昂のままに、床にあった花入れを投げつけた。割れた陶器の破片が、正親の頬を薄く切りつけたが、この男はにじむ血を拭うでもなく、ただ薄ら笑いを浮かべた。

「なにを左様に騒がれるのです。殿は、それがしにお許し下さったではないですか。喜連川は、正親の差配に一任すると」

「黙れ！ 誰が主君の所領を、己が望むままに懐に入れろと申した！」

——喜連川十五郷は、岡本讚岐守正親に差し与える。

秀吉は、正親に対し、そのような朱印状を下賜した。実際には、岡本家代々の所領は、塩谷郡のうち泉一郷に過ぎなかつたが、この天下人の裁定の前では、そんなことは関係がなかつた。

これにより、塩谷惟久は代々の領地に対する所有権を喪失し、家臣である正親に一切を奪われてしまったのだ。

「わしは、那須とは違う！ なんの罪も落ち度もないわしが、なぜかような目に遭わねばならぬ！」

「ほう、なんの罪も？」わざとらしく、正親は目を丸くした。「それはおかしいですか。ご自分がなにをしようとしていたのか、もう忘れてしまったのですか？」

「う、うるさい！ わしは知らぬ！ 第一、わしは、なにもしておらぬではないか！」

「家臣に、謀叛のための工作を命じておいて、それはいささか虫が良すぎませぬか。それに、殿が伊達方から内応を仕掛けられた際の一連の書状は、すでにこちらで押さえております。これが豊臣方に伝われば、喜連川を退去するどころか、命まで失いかねないでしうなあ。……しかしながら、仮にも我が旧主、路傍に放り出すのは哀れゆえ、特に情けをもって、我が喜連川領から、わしじゆく鷺宿一千石を割いてお譲りいたし申そう。さあ、早うそちらへ移られるがよろしい」

「お、おのれ！ おい、誰ぞ、正親を斬れ！ この痴れ者を斬り捨てよ！」

惟久は唾を飛ばして呼びかけたが、家臣たちは戸惑い、ざわつくばかりで、誰も立ち上がろうとはしない。無理もないことであった。いまや、豊臣政権の裁定という大義を背負っている正親に逆らうなど、秀吉に刃を向けるも同然である。もっとも、惟久が普段から、家臣を慈しんでいれば、あるいは命を捨ててでも、その恩義に報いようとする者もいたかもしれないが。

せせら笑う正親を、惟久は歯噛みし、睨みつけることしか出来なかつた。やがて、かつてこの城の主だった男は、口惜し氣に背を向け、足音荒く広間を出て行つた。

その後、喜連川の家臣たちも、一人、また一人と座を立つた。豊臣の権威を恐れ、誰もが口には出さなかつたが、彼らの顔にはありありと、私欲のために主家を陥れた正親への、軽蔑や憎悪が刻まれていた。

—— (惟久は) つい 終に岡本に鹽 (塩) 谷郡をうばわれける (『那須記』)

「おや、まだ居たのですか」

家臣たちがみな去つた広間に、一人残る新三郎に、正親は声をかけた。

「すでに、佐野家から北条の者は追い払われたそうではないですか。ならば、早う故郷に戻り、かつての主家に帰参なさつたらいかがです？」

しかし、新三郎は、その問いには答えず、逆に尋ね返す。

「復讐だったのか？」

「どういう意味ですかな」

「お主はかつて、家中の反発により、喜連川城を追われたと聞いている。そのとき、かばおうとしなかつた主君への意趣返しで、こんなことを……」

「ほほう、面白き見立てにござるな」

正親は愉快そうに笑つたが、

「されど、それは外れにござる。なんとなれば、それがしの追放騒ぎは、初めから、惟久殿と示し合せた芝居ゆえ」

「なんだと？」

「豊臣との繋がりを作るために、しばらく国許を離れる名目が欲しかったのですよ。下手に表立って動いて、喜連川がなにやら総領家を出し抜こうとしているのではないかと、義綱殿に疑われても面倒ですからな」

「……では、やはり欲のためか？」

正親は、ずっと以前から、喜連川領を狙っていたのではないか。いや、あるいは、上方で豊臣と関わるうちに、領地を奪う算段を思いついたのか。……そのような推測を、新三郎は問い合わせたが、正親はゆっくりとかぶりを振った。

「それがしは、どちらでも良かったのですよ。謀叛を持ちかけたときに、惟久殿がはつきりと断って下されば、そこで話は終わりだったのです」

「なんのことだ？」

「わかりませぬか。それがしは、義綱殿にも、同じ策を持ちかけたのです。そして、乗るかどうか試させて頂いたのですよ。……己が野心や、相手への疑念のために、軽はずみな行動を起こすようであれば、そんな領主は害でしかない。遠からず、なんらかの形でこの塩谷郡に、災いを持ち込んだに相違ありません。ゆえに、少々、<sup>はかりごと</sup>謀を施させて頂いた次第」

惟久は、その誘惑に乗ってしまった。

だが、そのあとに正親が、義綱をひそかに尋ね、策を説いたところ、この総領家当主は明確に拒絶した。

——確かに、喜連川を攻め滅ぼしてしまえば、わしにとって都合がいい。また、惟久が憎くないといえば嘘になる。しかし、一門の総領たる者が、この期に及んで左様な肅清を主導すれば、いかに大義名分を掲げたとて、塩谷の者は、次は己の番ではないかと疑念を抱くことであろう。

——それは結局、敵方にわざわざ調略の隙を与えるようなものじゃ。この緊迫した情勢下にあっては、悪手でしかあるまいよ。

義綱はそのように述べ、豊臣方・宇都宮方との旗色を変えぬ証として、誓紙をしたためて正親に託したのだという。

「義綱殿と惟久殿に、そこまで器量の差があるとも思えませんが、ただ、さすがに三十過ぎまで総領の責任を負っていれば、相応の分別はつくようですね。立場が人を育てるというのも、まんざら嘘ではないらしい」

「馬鹿げている」

新三郎は小さく舌を打った。

「では、総領家と喜連川、両方とも策に乗って来たときは、どうするつもりだったというのだ？」

「簡単なことですよ」

正親は肩をすくめ、

「そのときは、両家ともさっさと取り潰してもらうよう、宇都宮なり豊臣なりに進言するだけです。無論、そのあとに新しく家名を再興できるように、塩谷一族の者を一人、あらかじめ抱え込んではおきますがね」

まるで床飾りの掛け軸でも選ぶかのように、平然とした口ぶりで、正親はそう語った。

にわかに、信じられるような話ではない。しかし、どうしたわけか、ただの出まかせや絵空事として切り捨てるよりも躊躇<sup>ためら</sup>われた。嘘をつくのなら、この男はもっと上手くやる。そんな風に思えてならなかつた。

「ああ、そうだ、新三郎殿」

不意に、正親は思い出したように、

「もし、まだしばらく、佐野家に戻らないというなら、一つ、使いを頼まれてくれませぬか」

「使い？」

「ええ。書状を一通、届けて頂きたいのです」

そう言って、懐から一枚の文書を取り出し、手渡して來た。その文面に目を走らせるうちに、新三郎は、己の顔から血の気が引いていくのがわかつた。

正親めは老齢なれば、もはや戦働きは務まり難うございます。

しかしながら、喜連川城は関東より奥州へ至る街道の要所なれば、守りが拙く<sup>つたな</sup>くては、東国統治にあたって支障がございましょう。つきましては、先だって申し伝えたように、私はこの城を、関白殿下にお返ししたく存じます。そののちは、豊臣家の裁量によって、天下のために良き城主を選び、新たに任じて頂くよう、なにとぞお願ひ申し上げます。

豊臣家の奉行・増田長盛宛てに、そのような内容が書き連ねられていたのだ。

「なぜ、こんな……」

「それがしが城主をしていたら、血迷った惟久殿が奪還を企て、面倒なことにならないとも限らないでしょう？」

たしかに、城主が豊臣から送り込まれた者であれば、さすがに惟久も弓は引かないだろうが、だとしても解せない。それでは正親は、なんの見返りも得ることなく、悪名と恨みばかりを増やした末に、ただ塩谷の家名と平穏を守ったとでもいうのか。

「わからなくなつた」

呆然と呟き、新三郎はまじまじと正親を見た。

「お主が忠臣なのか、それとも奸臣なのか」

「どちらでもありませんよ。……それがしは、ただの化け狐ですからな」

そう言って、正親は踵を返した。胴服の背にあしらわれた白い老狐が、にやりと笑ったように見えた。

数日後、新三郎は佐野家に帰参するため、喜連川から去ることになった。懐には、例の書状を収めてある。城を発つとき、正親が見送りに付き添った。

丘陵上に築かれた城からは、辺りが一望できる。つづら折りの坂道を下りながら、新三郎はなんとなく、足を止めて景色を見た。

麓を流れる内川の水面が、朝の陽光を照り返している。その周囲に広がる水田では、敷き詰められた青稻が、波打つように風に揺れていた。城下町の、鮎売りや瓜売りの威勢のいい呼び声が、こちらにまで微かに聞こえてくる。思えば、こんなふうにじっくりと、喜連川の風景を眺めるのは初めてだったかもしれない。

「よい眺めですな」

そう言って、正親は新三郎の隣に立った。城下を眺める彼の顔つきは、これまでとは違ひひどく穏やかで、愛おしんでいるようにさえ見えた。

「去るのが惜しくなりましたかな？」

「……さあな」

未練を振り払うように、再び歩き出す。

(……きつね狐死すれば正に丘首す、か)

足を動かしながら、かつて耳にした、そんな言葉を思い出していた。狐は、死ぬまで故郷を忘れない。確かにそうなのかもしれない。正親が、どんな思いで此度の策を仕掛けたのか、新三郎はようやくわかったような気がしていた。

大戦の中で、戦火に巻き込まれることなく守られた風景を、もう一度、焼き付けるように目に映した。油蝉の鳴き声が、遠く背後から聞こえていた。

その後、ほどなくして、小弓公方——室町幕府体制における関東支配の責任者である、おゆみくぼう鎌倉こが（古河）公方家の分流——足利頼淳よりあつ よりすみ（頼純）が、新たな喜連川城主に任じられた。

さらに、豊臣政権の計らいにより、本家にあたる古河公方家の（実質的な）女性当主・氏姫が、頼淳の嫡子・国朝に嫁ぎ、古河・小弓に分裂していた鎌倉公方家の血筋は、喜連川において一本化された。これは、未だ東国では権威のある鎌倉公方の名によって、奥州・関東を繋ぐ街道に楔くさびを打ち込み、統治を固めようとする、秀吉の戦略によるものだろう。

塩谷惟久は、しばらく鷺宿に留まっていたが、やがて塩谷郡を離れ、母方の血縁を頼つて那須家に身を寄せ、さらにのち、常陸水戸へ流れたという。

岡本讚岐守正親は、喜連川城を引き渡したのち、豊臣家の直臣として、塩谷郡泉で三千三百余石を領した。彼は七十五歳まで長命し、その家系は豊臣滅亡後も、幕臣として残った。

了

### 《主要参考文献》

- ・「那須記」（『栃木県史』史料編 中世5 所収）
- ・『下野国誌』
- ・『寛政重修諸家譜』
- ・「塩谷系図」（『栃木県史』史料編 中世4 所収）※喜連川塩谷氏
- ・「下野国塩谷庄川崎郷塩谷系譜」（『矢板市史』所収）※川崎塩谷氏（秋田藩土塩谷氏）
- ・荒川善夫『戦国期北関東の地域権力』岩田書院、1997
- ・江田郁夫 編『中世宇都宮氏 一族の展開と信仰・文芸』戎光祥出版、2020
- ・大田原市那須与一伝承館 編『豊臣秀吉と那須氏 激動の天正18年』大田原市那須与一伝承館、2020
- ・さくら市市史編さん委員会 編『喜連川町史 第6巻 通史編I 原始・古代/中世/近世』さくら市、2008

# 伊達氏



## 塩谷氏略系図

川崎塩谷氏（総領家）

塩谷孝綱 — 義孝（弥六郎）— 義綱（伯耆守）



孝信（弥七郎）— 惟久（安房守）

喜連川塩谷氏

